

アランと小林秀雄

——読書について——

野村圭介

I

1

アラン Alain は、ランボオ Rimbaud・ジッ・Gide・ヴァレリー Valéry・ベルグソン Bergson 等と共に、小林秀雄が東大仏文科の学生時代からくり返して読んできたフランスの文学者や哲学者の一人である。アランとの出会いを彼はこんな風に語っている。或る日、神田のフランス書院という本屋で、たまたまアランの “Quatre-vingt-un Chapitres sur l'Esprit et les Passions” (精神と情熱に関する八十一章) を見つけた。「アランの何者であるか知らなかったが、こんな表題をつける人は並みの学者ぢやないといふ気がふとして買って帰り、一気に読み茫然として偉い男だと」⁽¹⁾ 感心した。早速、師の辰野隆に、今度は “Les Idées et les Ages” (思想と年令) を借覧し「哲学史上どういふ流派に属し、どういふ位置にある学者といふ様な事はわからなかったけれど、アランといふ人の人となりは呑みこめた様な気が」⁽²⁾ した。一気に読み云々のくだりは、彼自身アランの文章は、「字句は簡明で、偉さうな専門語なぞどこにも」⁽³⁾ ないが難解である、とか「アランの原文は少なくとも僕にとっては非常に

めんどうなもの」⁽⁴⁾だ、などと言っているところを見ると、若かりし頃の小林の通例で、いささか颯爽としすぎる嫌いがなくてもない。が、それはともかく、以後アランが小林秀雄の愛読書の一つとなったことは確かな事実であり、ついには自ら筆をとってその一書の翻訳を試みるまでに至る。「外国文学の紹介者の立場で仕事した事は一度もない。……僕はいつも自分の為に翻訳した。翻訳は、言はば僕の原文熟読の一法に過ぎなかった」⁽⁵⁾との彼の言を思へば、如何に彼が“*Quatre-vingt-un Chapitres sur l'Esprit et les Passions*”に熱中したかはおのずから明らかであろう。

ボードレール Baudelaire の『エドガー・ポー』*Edgar Poe, sa vie et ses œuvres; Notes nouvelles sur Edgar Poe (昭和二年)*を嚆矢として、ランボオの『地獄の季節』*Une saison en enfer (昭和五年)*、ヴァレリ『テスト氏との一夜』*La soirée avec Monsieur Teste (昭和七年)*、ジミッシュ『パリュド』*Paludes (昭和十年)*など小林秀雄にはいくつかの翻訳があるが、「湯ヶ島」と題されたエッセイ等から推察すれば、恐らくランボオの翻訳と並んで、アランの『精神と情熱に関する八十一章』(昭和十一年)の訳出に、彼は最も多くの時間と労力を要したと思える。かつまた量的に言っても、同書は、概して小品が多い小林訳の諸作品のうちで、最も分量が多い。しかし、彼自身「事件」⁽⁶⁾であったと語るランボオ体験を軸に、小林とフランス象徵派詩人との関係については、既にいくつかの見るべき論考があるとはいえ、ヴァレリーやベルグソンとの関わりについての研究はいまだ寥々たるものだし、いわんやアランと小林を結びつけて論じたものは、寡聞にしてまだその一篇をも眼にしたことはない。たしかに、ランボオやドストエフスキー、はたまたモーツァルトやゴッホを語ったようには、小林は一度も正面切ってアランを論じたことはない。翻訳を別とすれば、アランを扱ったものは、昭和九年『文学界』掲載の「アランの事」という原稿用紙十枚弱のエッセイ、十五年『改造』の「感想」(後「アランへ大戦の思い出」)と

改題」と題した二十数枚の読後感、十六年、桑原武夫訳『芸術論集』Système des Beaux-Arts についての『朝日新聞』への僅々一枚強の書評、以上三篇を数えるにすぎない。全てごく短かく、人目につきにくいものばかりであり、ことさら問題視して取り上げるべき何ものをも含まないようだ。たしかにアランは語りにくい作家(そもそも彼を何と呼べばいいのか。哲学者と言っても、思想家、評論家などと言っても、どこかびったりそぐわないところがある。むしろ私は、最も広義に解釈して作家と呼びたい)ではあるし、また声高には語りたくない作家でもあろう。ともあれ、やがて太平洋戦争へと突入する、不安と動揺にみちた昭和十五年の時点で、前記「感想」の中で強い共感をこめてアランを賛美する小林は見すごしがたい。彼はこのように言う。アランにしろ、ジッド、ヴァレリーにしろ、その如何にもフランス人らしい、鮮明かつ繊細な分析、類推の故にしばしば誤解されるが、実は彼等は「決意に充ちた野人」^㉑なのだ。「彼等の外観がどのやうなものであれ、彼等の思想の精髓は、それぞれ梃子でも動かぬといふ、頑固無情なものを蔵し、到底所謂教養人などの愛玩に適するものではない。」^㉒アランを読んでいつも感服するのは「彼の思想の頂と人生の瑣事との間を、一本の糸がしっかりと結んでゐる点だ。いろいろな観念を小分けにしてみたり、重ね合はせたり、組合せたりする様な仕事は、彼の興味を、まるっきり惹いていないといふ点だ。」^㉓そして『大戦の思ひ出』Souvenirs de Guerre にふれて「勇敢な兵卒アランは、飽くまで平素の哲学者アラン」^㉔であり「これほど成熟した人間の円熟した思想の裡に大戦の観察や体験を、凡そ無技巧、正確、平静、と僕等が読んでも思はれる様な語り方で、語った人があるかどうか、僕は知らぬ」^㉕と断じた後、小林は敢然として強くこう言い放つ。「現代といふものを解釈する、様々な惑わしい観念の群れなどは、もはやこの野人を動かすに足りない。彼は徹底して自分自身に還ってゐる。……僕は、ここに一人の不敵な面魂を持った人間の眼を見る、そして僕が又彼の眼に見られてゐる事を欲する」^㉖と。

戦争中から戦後、そして『本居宣長』の現在に至るまで、周知のように小林秀雄は、もの言わぬ美術の世界、とりわけ我国の古典の世界にいいよ深く沈潜していく。彼はもはやアランを語ることはない。私の誤りでなければ、たった一度だけ「私の人生観」（昭和二十四年）の中でアランに言及している以外、小林が彼にふれて書いたものを知らない。^㉔しかし、この唯一の例外は特記するに価する。何故ならそれは、小林が折に触れくり返し執拗に説き、今なお説いて倦まないこと、すなわち歴史を外側からながめ、諸々の補助概念によって把握し合理的に整合された歴史など形骸にすぎぬ、今現に生きている自分を離れて歴史などはない、歴史を知るとは己れを知ることだ、といった彼の根底的な信念といおうか、思想に密接につながるものであるから。

アランが、ある歴史家の書いたトルストイ伝について、そこに書かれた事柄は一つ一つを見ればみな疑いような事実である、しかし全体として見ると、どこか嘘らしい臭いがしてくる、「三途の川をうろついてゐる様なトルストイが現れる」^㉕と、論じていたのを自分はよく覚えていて、と言いながら、「私の人生観」で次の如く小林は述べている。

時間は、自分の歩く足を決して見せやせぬ。ところが、歴史家といふものはをかきな事をする。時間のやり直しをする。時間を逆に歩かうとする。「復活」から「アンナ・カレニナ」に還つて来る。「コサック」を書き乍ら、「クロイチュル・ソナタ」を予見してゐる。トルストイには決して起らなかった思想の様々な組合せが、歴史家の頭では、苦もなく起つてゐる。トルストイも私達と同様、常に未来を望んで掛け替へのないその日その日を前進したのだ。何故、歴史家といふものは、私達が現に生きる生き方で古人とともに生きてみようとしなないか。さういふ事をアランは書いてをりました。さういふ事になるのです。^㉖

戦後から現在に至る、成熟し円熟した小林秀雄の思想に、私はアランのそれと同一のものをしばしば強く感じる。アランに言及したものはごくわずかである、がしかし若年期のランボオの嵐が静まった後、ジッドよりも、ヴァレリーよりも、さらにはベルグソンよりも、その他如何なるフランスの文学者哲学者よりも、小林はアランに深い親近感を抱き、確かな信頼を寄せてきたのではないかと、ひそかに私は感じている。残念ながら、今私には、この二人を真正面からとり上げて、対照し比較し検討するだけの余裕も準備もない。また、本稿の眼目もそこにはない。それ故、例えば右の「私の人生観」に述べられた歴史観もその一つなのだが、アランと小林の両者に共通した根底的な物の考え方を、あと一つ二つ指摘するにとどめ、それを次章への橋渡しとしたい。

芸術を論ずるにしろ、宗教を論ずるにしろ、また人生百般の問題を論ずるにしろ、アランが常にくり返し説くところはこうである。確とした対象に基づくことなく放置された思考や夢想や想像力は、ただいたずらに空転するばかりであって、常に常に不毛でありしばしば危険なものとなる。確かな対象を持たない思考は、偶然的な観念連合の支配するところとなり、とりとめもない、いつ果てるともない自己とのむなしいおしゃべりに終始する。そのような思考は「少しも前進せず、何処にも到達することがない。」^① (elle n'avance point; elle ne mène nulle part) あたかもそれは、出口のないままに、観念のむなしい堂々めぐりのとりこになった不眠の夜の如きものだ。かかる思考の輪舞^{モンパル}を断ちきる為に、我々は「抵抗力のある対象を自己に与える」^② (se donner un objet résistant) 必要がある。「真の思考、統御された思考」^③ (la pensée véritable, la pensée gouvernée) は、常に対象に對する思考なのだ。「強い精神は、対象を前にしてのみ熟考する。」^④ (Un esprit vigoureux ne délibère que devant l'objet) つまりところ「人間は、対象を前にした時に於いてしか、自由でもなければ、強くもない。」^⑤ (l'homme n'est libre et fort que devant l'objet) 「自己の前に、抵抗力のある堅固な世界を、如何なる考慮も払わない非

情な世界を、常に見出す者は幸いなるかな。』^④ (Heureux qui trouve toujours devant lui le monde résistant et dur, le monde sans égards.)

フランにもまして、物に注目し、物を重視した者はないであろう。混乱にみち、しばしば盲動する夢想や想像力を、しかと現実存在する対象によって、固定し、規正することに芸術の大きな効用がある。彼は『諸芸術の体系』^⑤ *Système des Beaux-Arts* の中でこう述べている。事物が思いのままにならないからと苛立ったりするのは、実に幼稚な考え方であろう。思考は、不屈の必然にぶつかることによって鍛えられ、強化される。強固な障害物によってこそ、始めて人は真に思考することが出来るのだ。芸術作品とは、すべからくすぐれて物であるという性格を持つ。「故に芸術作品は、製作され、完結し、堅固なものでなければならぬ。」^⑥ (Il faut donc qu'une œuvre d'art soit faite, terminée, et solide.)

いかなる着想も作品ではないことを、はっきり言っておこう。そしてこの機会にすべての芸術家に忠告しておきたい、単なる可能のうちからどれが最も美しかろうなどと捜しあぐむのは時間の浪費というものである。いかなる可能も美しくはなく、ただ現実のもののみが美しいのだから。まず製作せよ、判断はそれからのことだ。これこそあらゆる芸術の第一条件である。芸術家 (artiste) と職人 (artisan) との言葉のつながりを見ても、このことはよくわかる。しかし想像力の本性に関する持続的な反省は、さらに確実に重要な考えに導いてくれる。それは、現実の対象をもたぬあらゆる冥想は必然的に不毛だということである。君の作品を考える、いかに、結構！ しかし、人は存在するものをしか考えることはできない。まず君の作品を作ってみることだ。^⑦

ところで、空漠たる思考、確かな対象たいしょうに基づかない思考、「抽象的な図式と変じ、大地に立つ足を失った」^四思想の不毛性、空しさは、たえず小林秀雄が説いてきたところでもある。彼は『本居宣長』を書き終えた後のあるインタビューで、文士は文をつくる一種の職人である、教祖とか何とかいろいろ言っているようだが、自分はどうに職人である、と答えている。^四 アランが、物をつくり出す手仕事に、職人達に、常に敬意を払っていたことを思い出そう。アランにしろ、小林にしろ、彼等が最も軽蔑するのは、物を創る忍耐も工夫も、そこにある喜びも苦しみも知ることなく、もっともらしい空疎な言辞を呈するやからだ。芸術家は、美についてなど考えない。そんな空想じみた考えからは何も始まりはしない。「芸術家は、物 Ding を作る、美しい物でさえない、一種の物を作るのだ。人間が苦心して様々な道具を作った時、そして、それが完成して、人間の手を離れて置かれた時、それは自然物の仲間に入入り、突如として物の持つ平静と品位とを得る。それは向うから短命な人間や動物どもを静かに眺め、永続する何ものかを人間の心と分とうとする様子をする。」^四 画家や彫刻家は言うまでもなく、音楽家も、詩人も小説家も一種の物を創り出す人間である。小林は、思想家さえもそうだと言う。「鑿うを振り上げる外にどう仕様があるか」^四 そういう行為が思想だ。「思想といふ一種の物を創る仕事」^四、「文体を欠いた思想家は、思想といふ物に決して到る事は出来」^四 まい、といった風に小林は語るのである。

また例えば、小林が宣長を引用しながら述べる、感情は訓練され馴致されなければ、その人の明瞭な所有物とならない、自分の物として見る事の出来る対象にならない、「歌とは、意識が出会ふ最初の物だ」^四 という言葉。あるいは、歌とは一種の礼であり「秩序なく泣いては、人と悲しみを分つ事が出来ない」^四 悲しみのうちにあって、悲しみをととのえ「悲しみを救ふ工夫が礼である即ち一種の歌である」^四 という言葉等に、私は、アランの語るところと酷似したものを見る。が、しかし、もうこのあたりで止めにしよう。先にも言ったように、今私の眼目は、両

者の思想をいろいろと比較検討することにはない。問題を限定しよう。私は、本稿を「読書について」と題した。

II

森有正は、「彼はアリストテレスを十八回読破したと言う！」⁽¹⁾と、感嘆の声を発しているが、およそアランほど徹底して古典を読みこんだ者はいないであろう。例えば、彼は、トルストイ『托斯の大作』『戦争と平和』『Guerre et Paix』を十回以上、あの老大なサン・シモン Saint-Simon の『回想録』Mémoires を一行も飛ばさずに少くとも三度以上反読する。『谷間の百合』Le lys dans la vallée『バルムの僧院』La chartreuse de Parme『赤い黒』Le rouge et le noir 等に至っては実に五十回以上も読み返し、しかも読むたびに喜びを新にする。「ステイヴンソンの『宝島』は、ほとんど記憶の中に書きとめられている」⁽²⁾ (L'île au Trésor, de Stevenson, est presque écrite dans ma mémoire) と言う。おそく、プラトン Platon やスピノーザ Spinoza デカルト Descartes ヴーゲル Hegel オーギュスト・コント Auguste Comte などの哲学者も、こんな風にして、その全著作をくり返して彼は熟読したのであろう。例えば『谷間の百合』が退屈だとかつまらぬとか言う者がいるが、彼等はかけ足でページからページへと急いだだけで、ろくによく読みもしないで勝手な言辭を弄している、これこれしかじかの素晴らしい箇所を引用してみると、彼等はそんな部分があったことにさえ全く気づいていない。肝心の作品をよく読みもしないで、手前勝手な理屈をこねまわす文学研究者の何と多いことよ、とアランは嘆くのである。⁽³⁾

さてここで、アランの有名なプロポ Propos を一つ引用し、訳出してみたい。いかにもアランらしい、その自在な語り口にしげしげ耳を傾けてみたい。

丁度今はバカンスの季節だが、次から次へと名所旧蹟のたぐいをかけずり回る人々で、どこもかしこもいっぱいだ。もちろん、わずかの時間のうちに、いっぱい見物しようという寸法だろう。なるほど、あとで話の種にするのであれば、これほど結構なことはない。引き合いに出す場所の名前は多いに越したことはなからうし、これで十分暇つぶしにもなるだろう。

だけでも、自分のために、本当に見るために、そんな風にかけるのだとすると、私は首をかしげざるを得ない。走りながら眺めれば、何もかも似かよって見える。いかなる溪流も、溪流であることに変わりはない。かくして、大急ぎで世界を駆けめぐってきたところで、出発前よりたいして思い出が豊富になってはいない。

何を見物するにしろ、その真の豊かさは細部にある。見る、ということ、細部を一つ一つ経めぐること、その各々にしばし足をとどめること、そして再び全体を一目で把握すること、である。こんな手順を踏みながらも、次から次へと素速く見て回ることができるのかどうか、私にはわからない。が、少くとも私はだめだ。毎日、美しいものを眺めることが出来、例えばサントゥアン寺院を、自分の家にかけてある絵と同じように見ることの出来るルーアンの人達は幸せである。

それに対し、美術館にしろ観光地にしろ、たった一度きり立ち寄るだけでは、まづきまってその思い出は混乱し、ついには輪郭のぼやけた一種の灰色の画面となってしまうだろう。

私の好みに従えば、旅行するとは、一度に一メートルか二メートル進んでは立ち止まり、再び同一の物の新たな相貌をじっくり眺めることなのである。しばしば私は、ほんの少し右や左に動いては、腰をおろす。すると、全てが一変して見える。それは、百キロ進むよりも、はるかに有益だ。

一つの溪流から次の溪流へと訪れたところで、眼に映るのは、常に同じような溪流である。しかし、岩から岩

へと足場を変えれば、この同じ溪流が一步ごとに姿を変える。すでに見物したものへ再び立ち戻ると、間違いく、それは新しいもの以上に心をとらえて離さない。事実、そこにあるのは、新しいものなのだ。⁽⁴⁾……

題して「旅行者」*Les voyageurs* というプロボなのであるが、いくつかの言葉を入れ変えれば、そっくりそのまま、これは、読書についての卓抜なエッセイとも解することができよう。右には、ルーアンの名高い寺院の例が引かれているが、アランは又その『諸芸術の体系』の中で、小説の読み方を建築の見方と同一のもとにとらえて言う。「実際、小説は、くり返し見直し、探究しなければならぬ点で、建築や彫像に相似たものだ。このように解すれば、細部の価値、そのおのおのが、一つの思想、一つの感情を荷なう細部の価値がわかるだろう。再読するときは、ごく些細な筆致のうちにも予感がある。だから真の小説は、不意打によって喜ばすような作品とは別のものである」⁽⁵⁾ 云々。

偉大な古典は、二十回、三十回の反復熟読によって、ようやくその真価を発揮するものだ。アランは、くり返しくり返し同じ曲を、辛抱強く練習する音楽家の例をあげる。⁽⁶⁾ 三十回目の反読にして始めて喜びをもたらしうな本には、最初の読書の際、往々にして苦痛を覚えるばかりであり、報われることの極めて少ないものである、と平然として彼は語る。⁽⁷⁾ 一見して、全てが易々と理解可能のように按配されているが如き、二流の作品や、概説書、解説書のたぐいばかりを読む者は、何程かの根気と集中力とかあれば誰しもが知ることのできる、人類の貴重な遺産をついに分ち持つことはなからう。容易な楽しみを求めるものは、本当の楽しみを知らない。アランは、実にうまいことを言う。「まず、退屈することを知らなければならない」⁽⁸⁾ (*il faut savoir s'ennuyer d'abord*) と。

「駈けて行くばかりで、決して後戻りしない読書、絶対に立止らうとしない読書は、教養の大敵である」⁽⁹⁾ (*la*

culture a pour ennemie principale cette lecture qui va courant et ne revient jamais, et ne s'arrête jamais) アランは、せっかちな読者の首筋をひつつかまえ、たえず彼を作品に、作品そのものに連れ戻そうとする。「けだし、何物をもつてしても作品には代えられぬから。必要なのは、作品を読むこと、そして反読することである。作品の全体がどんな些細な一語のうちに現前する、というところまで反読すること。」^④ (car rien ne peut remplacer l'oeuvre; il faut la lire et relire, jusqu'à ce que l'oeuvre entière soit présente dans le moindre mot.)

作品の全体が、どんな一語のうちに現前するまで反読する、とは大へん強い言葉であるが、私は小林秀雄にもほとんど同一の言葉を見出す。読書百遍とか読書三到とかいういい古された教訓には、実に容易ならぬ意味があると言う小林は、「読書について」と題された断片的なエッセイでこう述べている。誰れでもよいが、一流の作家の全集を読むのは非常によい事だ。全集を、日記から書簡まで、隅から隅まで読む。一流といわれるような人は、どんなにいろんな事を考え、試みていたかよくわかるだろう。それまで単純に考えていた、その作家の思想とか性格は、もはや判然としたものではなくなり、ますます奥の方に手探りで探さなければならぬものとなるう。「僕は、理窟を述べるのではなく、経験を話すのだが、さうして手探りをしてゐる内に、作者にめぐり会ふのであって、誰かの紹介などによつて相手を知るのではない。かうして、小暗い処で、顔は定かにわからぬが、手はしっかりと握つたといふ具合な解り方をしてふと、その作家の傑作とか失敗作とかいふ様な区別も、別段大した意味を持たなくなる、と言ふより、ほんの片言隻句にも、その作家の人間全部が感じられるといふ様になる。」^④ (傍点引用者)

☆

単に観念の図式でしかない歴史、かけがえのないただ一度きりの人生を歩む生身の人間が不在である歴史に対す

る、小林の不信・嫌悪については、先に「私の人生観」から引用して少し触れておいたが、アランの歴史嫌いも又、よく知られている事実である。「歴史家氣質」L'esprit historienと題したプロポには、例えばバルザックの小説を、当時の社会を研究するために、同時代のくだらぬ小説や雑誌、新聞、パンフレット等の類と同等に扱い、単なる歴史的資料として読みとばす歴史家を揶揄し、彼は、実に多くのものを精力的に読破するが「腹の底では全てを軽蔑しつつある」(II lit, il lit, et dans le fond méprise tout)とある。さらに『我が思索の歴史』Histoire de mes penséesの中では、若い頃、歴史がなかなか好きになれなかったのは、つまるところそれが要約 résuméでしかなかったからだ、とアランは言う。概説でしかない歴史、整合された理窟に過ぎない歴史に、何の感動があらうか。そして後年、「サン・シモンやレッツの回想録」セント・ヘレナ日誌(les Mémoires de Saint-Simon, ceux de Retz, et le Memorial de Sainte-Hélène)等を、隅から隅まで幾度もくり返し読むことにより、始めて歴史を面白く感じた。「歴史のいくつかの部分を知り、理解するに至った」(enfin j'ai su et connu des parties de l'histoire)と語っている。

アランの要約・嫌いは、およそ徹底したものである。文学であれ哲学であれ、偉大な作品を要約することはほとんど不可能であり、またそれは、有益であるより常に有害である。「始めから終りまで全てを読み、抜粋・要約などしない私の読書法」(ma méthode de lire de bout en bout et de ne pas faire d'extraits)と、彼は言う。そんな風にして「私はプラトンを全て読み、アリストテレスのほぼ全作を読んだ」(Je lus Platon entièrement et presque tout Aristote)と。

一般教養叢書が刊行されたと知ると、私はすぐにもその本のもとへはせ参じる。きつとそれは、素晴らしい原

典とか貴重な翻訳、つまりその全てが詩人や政治家、モラリスト、思想家達の宝物に違ひなからうと思つて。

だが、そうした類のものは全くない。実は、大変学識に豊み、いかにも教養の高そうな人達が、自分達の教養の一端を見せてくれようという寸法なのだ。ところで、教養なるものは、いささかも受け渡しの出来るものでもなく、またいささかも要約できるものでもない。教養を身につけるといふこと、それは各々の分野で、源泉までさかのぼり、自分自身の手のひらで飲むことなのであつて、決して人から借りた杯で飲むことではない。⁴⁴

右は『教育についてのプロポ集』Propos sur l'Educationの一節であるが、フランは同じ個所で、またこうも述べている。自分が真に人間について学ぶのは、モリエール Molière やシェークスピア Shakespeare やバルザック Balzac 等によつてであり、心理学概論のたぐいを開いてみたところで、いささかも人間に関して知るところはない。かつまた、もろもろの情念についてバルザックが考えたところを、たかが十頁ぐらゐに要約などしてほしくはない。天才の思考は、彼の描くなかば漠然とした世界全体の中に生きているのであり、そこから何物も切り離すことなどできない。ただ詩人や小説家の歩みにそつて歩むだけだ。常に原典に立ち帰ること。抜粋や要約などはいらぬ。抜粋や要約は、再び我々を原典へと送りとどけるだけだ。⁴⁵

何故、作品はその全てを読まなければならないか、解説や要約や抜粋が何故無意味であるかを『文学についてのプロポ集』Propos de Littératureの中で、造型芸術の例をあげて、フランは説明している。廃墟に立つ一本の石柱は「我々の顔へ、その汲みつくせぬ思想^{イデオロギイ}を投げつける」⁴⁶ (nous jette au visage son inépuisable idée) 柱の思想とは柱それ自体であり、その石の中にとらえられて離れない。他の何物も、これにとつて代ることはできない。しかしそれは、文学作品も同じだ。例えば「シェークスピアの『嵐』は、もろもろの思想で充満しており、終

幕まで意味を告げてやまないだらう」(『La Tempête de Shakespeare; cela est plein d'idées et signifiera jusqu'à la fin du théâtre』) その思想は劇全体のかたまりの中にこめられており、別な風にはその思想を表現できぬ。如何なる要約も解説も模倣も、作品の告げるところを言い表わすことは不可能である。作品の中では、全てが重要なのだ。不必要なものなど何一つない。全体から分離独立できるような部分はない。取るに足らぬと思われる部分も、全体の中に置かれると光彩を放つのだ。「抜粋や選文集などものはや読もうとも思わぬ」(『on ne veut plus lire d'extraits ni de morceaux choisis』) と言うフランは、また、注釈も必要だとする。普段に偉大なテキストへ立ち帰ること。しかも「注釈なしの作品に」(『à l'œuvre sans notes』) だ。「注釈は美しいものにしがみついている凡庸である」(『La note, c'est le médiocre qui s'accroche au beau』) の「害虫を振り落さねばならぬ」(『secouer cette vermine』) 注釈や索引の助けを借りずに、ひたすら原典を熟読すること。くり返し、読みに読み、原典と親しむ以外にすべはない。教養文化は礼拝に通じる。如何なる仲介もへずに、確かに、無心に「作者についていきたい」(『Je veux obéir à l'auteur』) フラトンを理解することが問題なのではない。そんなことは大したことではない。「自分自身がフラトンにならなければならぬ」(『il faut être soi-même Platon』) としてフラトンと共に「苦心して考えなければならぬ」(『penser difficilement』) まちしくフランこそ、小林秀雄言うところの、読書の達人であろう。

「万葉」の古言は、当時の人々の古意と離すことは出来ず、「源氏」の雅言は、これを書いた人の雅意をそのまま現す、それが納得出来る為には、先づ古歌や古書の在ったがままの姿を、直かに見なければならぬ。直かに対象に接する道を阻んでゐるのは、何を措いても、古典に関する後世の註であり、解釈である。

仁斎の読書法では、文章の字義に拘泥せず、文章の語脈とか語勢とか呼ぶものを、先づ掴め、と教へる。個々の動かぬ字義を、いくら集めても、文章の語脈語勢といふ運動が出来上るものではない。先づ語脈の動きが一举に捕へられてこそ、区々の字義の正しい分析も可能なのだ。訓詁学者は、逆のやり方、道理上不可能なやり方をしたがるから、自己流に陥り、勝手に聖人の思想を再構成する事になる。歌に動かせぬ姿がある如く、聖人の正文にも、後人の補修訂正の思ひも寄らぬ姿がある。⁸⁴

右の前者は『本居宣長』、後者は『考へるヒント』の中の「学問」からの引用である。アランの実践した読書法とおのずから照応するところがあるのは、もはや言うをまたないであろう。小林秀雄の『考へるヒント』の中に収録された諸篇にしる大著『本居宣長』にしる、これは一種壮大な読書論ではないか、とかねがね私は思っているが、小林はそこで、ただひたすら古典を読むことによって、己れを磨き、自己の学問を鍛えていった、仁斎や徂徠や宣長などを、強い共感をこめて語って倦まない。彼等「学問界の豪傑達」⁸⁵「日本の近世の学問の雄は、皆、読書の達人であった。」⁸⁶仁斎は『語孟』を、契沖は『万葉』を、徂徠は『六経』、宣長は『古事記』という風に、彼等は皆、己れの信ずるところに従い、まっすぐに古典のふところにとびこみ、私心を離れて、忍耐強く、文字通り読書百遍を実行した。彼等の学問の「勝負は、文字通り、ただ、読みの深さで決った」⁸⁷と小林は書く。「彼等は、ただ、ひたすら言を学んで、我が心に問うたのであり、紙背に徹する眼光を、いかにして得ようか、と肝胆を砕いたのである。」⁸⁸

つくづくと一枚の美しい絵を眺める。微妙に溶けあつた色彩に心を奪われて立ち止まり、雄勁なはたまた繊細な

線の動きゆをつくりと眼でたどっていく。一枚の絵を前に、あるいは近づき、あるいは遠ざかり、右に少し動き左に少し動く。ある時は細部を吟味し、又ある時は全体を一瞥する。古典を、傑作を前にした読者も、絵画鑑賞者と変るところはない。すなわち「見ることを学ばなくてはならない。」(Il faut apprendre à regarder) 熟読し、玩味し、一つ一つの語句や文章につくづくと眼を凝らすのだ。性急にただ意のみを追求めても無駄だ。「美しい形に従って思考する」(penser selon la forme belle) のだ。これはもちろんアランの言葉なのであるが、いくらか注意深い小林秀雄の読者なら、小林がしばしば、例えば、読むのではなくて眺めるのである、と言ってみたり、又、文章の姿、歌の姿といった風に、姿や形という語を好んで使用するのに気づくことであろう。そのいくつかの例をひろってみよう。「文学を解するには、読んだだけでは駄目で、実は眺めるのが大事なのだ。」(私)「私が、『貸問あり』が純粹な散文だといふのは、その散文としての無言の形を言ふ。何が書いてあるかなどといふ事は問題ではない、とても言ひたげな、その姿なのである。」以上二つは「井伏君の『貸問あり』」の一節。「徂徠は、自分の学問の種は、『本文ばかりを、年月久しく、詠め暮し』てゐるうちに、直覺したところに蒔かれた。或は、四書五経を、『読むともなく、見るともなく、ただうつらうつら見居候内に』浮んだ様々な疑ひを種として、経学とは、かくの如きものと合点するに至ったとまで極言してゐる」(弁名)。「仁斎に、『六経ハ画ノゴトク、語孟ハ画法ノゴトシ』といふ言があるが、彼の讀書態度から推せば、語孟も亦、読んで字の如しで済ませる本ではなく、見て見飽きぬ画の如きものであったらう」(弁名)。「いかにも宣長らしい、言はば何気ない姿をした名文」(本居宣長)。「歌は、いかにも『言葉たらず』といふ姿に見えるのだが、『伊勢』のうちに同じ歌に出会ふと、さふは感じないのが面白い。『心余りて』物語る、その物語の姿を追った上で、歌に出会ふが為であらうか」(本居宣長)。「これら源平時代の甲冑の、眼の前に現じてゐる姿は、心のうちで捕へてゐる『平家』といふ文学の姿そのままだ」(平家物語)。「歌

は、意味のわかる言葉ではない。感じられる言葉の姿、形なのです。言葉には、意味もあるが、姿、形といふものもある」(美を求める心)㉔。きりがいいから、これでやめておく。

☆

とはいえ読書は楽しみである、楽しいものである。アランは、『バルザックと共に』Avec Balzac の冒頭の章を「読書の幸福」Bonheur de lire と題している。ペンを片手に、ノートを取り、赤線を引きながら詩や小説を読む、自称研究者達の精神の貧困は、アランの慨嘆するところだ。メモされ、カードに収まった知識は死んだ知識も同然だ。彼は、数学の理論書でさえも、まるで小説を読むように読む㉕と言う。哲学の本も変りはない。プラトンにせよ、デカルトにせよ、ヘーゲルにしろ、コントにしろ、ことさら彼等の思想などを探ることなく、モンテーニュやバルザックを読むような具合に、気ままに、楽しみながら、心ゆるやかに読むこと。小林秀雄の愛用する言葉を用いれば、漫読することだ。何かを学ぼうとして、自分は何物も学んだことはない、㉖とアランは言う。「私見によれば、記憶にとどめようとなどせず、ただ気晴らしに読むのが秀れた読書法なのだが、これは余りに知られていない。こんな風にして読んだものは、我々と一体となり、我々を豊かにし、和ませるのだ。」㉗ (C'est un grand art, selon mon opinion, et trop ignoré, de lire sans vouloir retenir, et simplement pour se distraire; cela s'incorpore; cela nourrit et assouplit.)

小林は、仁斉について語りながら「彼は、精読、熟読といふ言葉とともに体読といふ言葉を使っているが、読書とは、信頼する人間と交はる楽しみであった」㉘と述べているが、最後に『本居宣長』から一つ引用してしめくくりとしたい。おそらくこれは『宣長』の中でも、最も感銘深い一節であろう。

仁斎はかう言つてゐる。「学者苟モ此二書（論語、孟子）ヲ取ラバ、沈潜反復、優游饜飫^{ウヱウ}、之ヲロニシテ絶タズ、之ヲ手ニシテ積カズ、立テバ則チ其ノ前ニ参ズルヲ見、興ニ在レバ則チ其ノ衡ニ倚ルヲ見、其ノ警歎ヲ承クルガ如ク、其ノ肺腑ヲ視ルガ如ク、手ノ之ヲ舞ヒ、足ノ之ヲ踏ムコトヲ知ラズ。夫レ然ル後ニ、能ク孔孟ノ血脈ヲ識リ、衆言ノ淆乱スルモ、惑ハサレザルヲ得ン」。仁斎は、その批判的な仕事の物差を持つてゐたわけではない。孔孟の血脈を自得した喜びが、自分の仕事の原動である事を固く信じた。「語孟」の字義の分析的な解は、この喜び自体の分化展開であつたと見てよい。この喜びを知らぬ学者は、「筌ヲ認テ魚ト為シ、蹄ヲ取テ兔ト為ス」徒に過ぎず、そのような「語録精義等ノ学ハ徒ニ訓詁之雄ノミ、何ゾ以テ学トスルニ足ラン」（読宋史道学伝）と笑つてゐる。

アランにしても、小林秀雄にしても、文字通り大読書人であり、読書の達人である。だが、共に、いわゆるブックッシュな臭みをいささかも感じさせない。書齋くさがが全くない。しかしそれも至極当然のことであらう。彼等は、自己の現在の生、二度とくり返すことのないかけがえない今の生を離れて、書を読み物を考えることはない。彼等は、何よりもまず、眞の生活人なのであるから。

注

I

- (1) 『小林秀雄全集』（全十二巻、新潮社、昭和四十三年五月完結。以下「全集」と記す）第三巻「アランの事」二五三頁
- (2) 同右
- (3) 同右、二五五頁
- (4) 『精神と情熱に関する八十一章』（角川文庫）「訳者後記」
- (5) 全集、第二巻『テスト氏の方法』三〇七頁

- (6) 同右、「ランボオⅢ」一五二頁
- (7) 全集、第七巻、「アラン『大戦の思ひ出』」一〇六頁
- (8) 同右、一〇七頁
- (9) 同右、一〇〇頁
- (10) 同右、一〇七頁
- (11) 同右
- (12) 同右、一〇八頁
- (13) 但し、「文学の四十年」(中央公論社版・日本の文学『小林秀雄』月報・昭和四十年)という大岡昇平との対談には、小林の「あの人(正宗白鳥)の文章は、アランなんかの文章とたいへん似たところがあるよ。だけれどもアランというのは芸人でしょう。芸を誰が育てたかというと、伝統なんだよ。哲学的伝統ですよ。」との発言があり、又昨秋(昭和五十三年)東京創元社から再刊を見た『精神と情熱に関する八十一章』に、「五三年七月執筆のごく簡単なあとがきが付されてある。」
- (14) 全集、第九巻「私の人生観」三十一頁 小林がここで言及しているテキストは“*Preliminaires à l'esthétique*”(Gallimard, 1939)に収録された「ロボ“*Pensée historique*”である。なお「三途の川」とは Stryx の訳語。
- (15) 同右
- (16) Alain: *Eléments de Philosophie* (Gallimard, collection Idées, 1966) p. 331
- (17) Ibid.
- (18) Ibid.
- (19) Ibid.
- (20) Ibid. p. 332
- (21) Ibid.
- (22) 旧題「芸術論集」を、訳者の桑原武夫は、昭和五十三年に改訳版を上梓するに当り、「諸芸術の体系」と改めた。
- (23) Alain: *Système des Beaux-Arts* (Bibliothèque de la Pléiade, “Alain: Les Arts et les Dieux”, 1968) p. 236
- (24) 桑原武夫訳『フラン・諸芸術の体系』(岩波書店、昭和五十三年)三十八頁 ‘*Système des Beaux-Arts* (pléiade) p. 236
- 原文は次の通り。Disons qu'aucune conception n'est oeuvre. Et c'est l'occasion d'avertir tout artiste qu'il perd

son temps à chercher parmi les simples possibles quel serait le plus beau ; car aucun possible n'est beau ; le réel seul est beau. Faites donc et jugez ensuite. Telle est la première condition en tout art, comme la parenté des mots artiste et artisan le fait bien entendre ; mais une réflexion suivie sur la nature de l'imagination conduit bien plus sûrement à cette importante idée, d'après laquelle toute méditation sans objet réel est nécessairement stérile. Pense ton œuvre, oui, certes ; mais on ne pense que ce qui est : fais donc ton œuvre.

- (25) 全集、第九卷、「私の人生観」五十三頁
- (26) 朝日新聞「ひと」欄切抜
- (27) 同全集、第九卷「私の人生観」四十九頁
- (28) 同右、五十一頁
- (29) 同右
- (30) 同右、五十二頁
- (31) 小林秀雄『本居宣長』（新潮社、昭和五十二年）二六八頁
- (32) 全集、第十二卷「言葉」一五六頁
- (33) 同右

II

- (1) 『森有正全集』第二卷（筑摩書房、昭和五十三年）「砂漠に向って」三八八頁
- (2) Alain : Propos de Littérature (Paul Hartmann, 1934) p. 147
- (3) Ibid., p. 63
- (4) Alain : Avec Balzac (Pléiade "Les Arts et les Dieux") p. 940~941

訳出した部分の原文は次の通り。

Alain : Propos (Pléiade, 1956) p. 7~8

En ce temps de vacances, le monde est plein de gens qui courent d'un spectacle à l'autre, évidemment avec le désir de voir beaucoup de choses en peu de temps. Si c'est pour en parler, rien de mieux ; car il vaut mieux avoir plusieurs noms de lieux à citer ; cela remplit le temps.

Mais si c'est pour eux, et pour réellement voir, je ne les comprends pas bien. Quand on voit des choses en courant, elles se ressemblent beaucoup. Un torrent, c'est toujours un torrent. Ainsi celui qui parcourt le monde à toute vitesse n'est guère plus riche de souvenirs à la fin qu'au commencement.

La vraie richesse des spectacles est dans le détail. Voir, c'est parcourir les détails, s'arrêter un peu à chacun, et, de nouveau, saisir l'ensemble d'un coup d'œil. Je ne sais si les autres peuvent faire cela vite, et courir à autre chose, et recommencer. Pour moi, je ne le saurais. Heureux ceux de Rouen qui, chaque jour, peuvent donner un regard à une belle chose, et profiter de Saint-Ouen, par exemple, comme d'un tableau que l'on a chez soi.

Tandis que, si l'on passe dans un musée une seule fois, ou dans un pays à touristes, il est presque inévitable que les souvenirs se brouillent et forment enfin une espèce d'image grise aux lignes brouillées.

Pour mon goût, voyager c'est faire à la fois un mètre ou deux, s'arrêter, et regarder de nouveau un nouvel aspect des mêmes choses. Souvent, aller s'asseoir un peu à droite ou à gauche, cela change tout, et bien mieux que si je fais cent kilomètres.

Si je vais de torrent en torrent, je trouve toujours le même torrent. Mais si je vais de rocher en rocher, le même torrent devient autre à chaque pas. Et si je reviens à une chose déjà vue, en vérité elle me saisit plus que si elle était nouvelle, et réellement, elle est nouvelle.

- (16) Alain : *Système des Beaux-Arts (Pléiade "Les Arts et les Dieux")* p. 454~455

En vérité le roman ressemble aux monuments et aux statues en ceci qu'il faut les revoir et les explorer ; on comprend alors le prix de ces détails dont chacun portera une pensée et un sentiment ; et, quand on relit, il y a un pressentiment dans les moindres traits. Ainsi le vrai roman n'est-il pas de ces œuvres qui plaisent par la surprise.

- (17) Alain : *Éléments de philosophie*, p. 325

- (18) Alain : *Propos sur l'Éducation* (Presses universitaires de France, 1967) p. 190

- (19) *Ibid.*, p. 10

(6) Ibid., p. 148

(7) Alain : Propos de Littérature, p. 63

この部分の訳は、井沢義雄・杉本秀太郎訳『マラン人生語録』（弥生書房、昭和五十三年）から借用し、二、三の字句を改めた。

(11) 『小林秀雄全集』第四卷「讀書とくつ」二二六七頁

(12) Alain : Propos (Pléiade) p. 109

(13) Alain : Histoire de mes pensées (Pléiade " Les Arts et les Dieux " p. 28

(14) Ibid.

(15) Ibid., p. 27

(16) Ibid.

(17) Alain : Propos sur l'Education, p. 98

Quand on m'annonce une Bibliothèque de Culture Générale, je cours aux volumes, croyant bien y trouver de beaux textes, de précieuses traductions, tout le trésor des Poètes, des Politiques, des Moralistes, des Penseurs. Mais point du tout ; ce sont des hommes fort instruits, et vraisemblablement cultivés, qui me font part de leur culture. Or, la culture ne se transmet point et ne se résume point. Etre cultivé c'est, en chaque ordre, remonter à la source et boire dans le creux de sa main, non point dans une coupe empruntée.

(18) Ibid., p. 99

(19) Alain : Propos de littérature, p. 62

(20) Ibid., p. 62~63

(21) Ibid., p. 63

(22) Alain : Propos sur l'Education, p. 99

(23) Ibid.

(24) Ibid.

(25) Alain : Propos de Littérature, p. 60

- (26) Alain : Avec Balzac (Pléiade, "Les Arts et les Dieux) p. 932
- (27) Alain : Propos de Littérature, p. 7
- (28) Ibid.
- (29) 小林秀雄『本居宣長』五十二頁
- (30) 全集第十二卷「学問」一八六頁
- (31) 『本居宣長』九十頁
- (32) 全集第十二卷「辞名」一九八頁
- (33) 同名「学問」一八一頁
- (34) 同右
- (35) Alain : Propos sur l'Education, p. 148
- (36) Alain : Propos de Littérature, p. 62
- (37) 全集第十二卷「井伏君の『賃間あり』」三十九頁
- (38) 同右
- (39) 同右「弁名」二〇〇頁
- (40) 同右
- (41) 『本居宣長』二二一頁
- (42) 同右「三一五頁
- (43) 全集、第十二卷「平家物語」九十八頁
- (44) 全集、第九卷「美を求める心」二二六頁
- (45) Alain : Avec Balzac (Pléiade "Les Arts et les Dieux ") p. 932
- (46) Ibid.
- (47) Alain : Eléments de Philosophie, p. 326
- (48) 全集、第十二卷「学問」一八七頁
- (49) 『本居宣長』九十三頁